

館報 Book Guide

高崎市八千代町二丁目4番1号
群馬県立高崎高等学校
図書館

お題は 翠巒祭企画 フォト短歌

ズバリ高崎高校!



展示会場

今年の翠巒祭では、生徒たちの感性が光る「フォト短歌」を企画。写真一枚と短歌一首で日常の瞬間や思いを切り取り、順位を決めるこの企画。たくさんの力作が集まりました。

来場者投票の結果、第一位に輝いたのは、地濃光希さんの作品。「ウキウキで翠巒祭に来てみれば踊るメイドに騒ぐ変態」弾ける笑顔とカラフルボンボンが、祭りの高揚感をそのまま閉じ込めたような一枚です。軽快なリズムが、青春の躍動をより鮮やかに響かせています。第二位は武井咲太郎さんの作品。マークシートの写真に「マー



第1位 3年 地濃 光希

第2位 3年 武井 咲太郎

第3位 1年 新井 悠雅



入口の黒板アート

(担当 一年 神宮)

特別企画

けんごの@小説紹介をさぐる

インタビュー

この度、私たちは若者から絶大な人気を誇るけんご@小説紹介さんに、オンラインでインタビューさせていただきました機会を得ました。

この記事を読めば、読書への新しい扉が開くだけでなく、自分の「好き」とどう向き合い、将来を考えていけば良いのか、そのヒントがきつと見つかるはずですよ。

Q 本日はお忙しい中ありがとうございます。なぜ地方の高校生である私たちのインタビューを受けてくださったのでしょうか？

A ありがたいことに、新聞社やテレビなど、様々なメディアから取材の依頼をいただくことが増えました。ですが、僕の活動の根本にあるのは「十代の中高生の皆さんに、本の面白さを届けたい」という気持ちです。だから、高校生の皆さんから直接「話を聞きたい」と言っていただけなら、ぜひ協力したいと思ってお引き受けしました。

Q けんごさんは学生時代、本を読むタイプではなかったと伺いました。図書委員としては気になるのですが、学校の図書館は利用していましたが？

A 恥ずかしながら、中学・高校時代に図書館を利用した記憶が一切ないんです…。なぜ利用しなかったのかを考えると、理由はシンプルで、「読書をするきっかけ」も「図書館を利用するきっかけ」もなかったからだと思います。僕自身、読書の面白さに気づくきっかけがなかった。だから、今の小説紹介の活動では、この「きっかけ作り」が一番大切にしています。

Q 私たちも図書館の利用率を上げたいと日々考えています。どうすれば、多くの生徒が来てくれるようになるのでしょうか？

A やはり「きっかけ作り」が鍵だと思います。僕がもし図書委員だったら、次の二つのことを考えるかもしれません。学校の図書館の役割は、本を読むだけではありません。調べ物をし

たり、進路に関する情報を集めたりする場所でもあるはずですよ。「こんな使い方もできるよ。」とアピールすることで、これまで縁がなかった生徒も足を運ぶ理由が生まれるかもしれません。また、何か面白い企画があれば、「行ってみようかな。」と思ってもらえますよね。どんな企画ならみんなが興味を持つか、模索してみることも大切だと思います。

Q 書店にはたくさん本がありますが、どうやって紹介する本を選んでいるのですか？

A 本の選び方は、活動を始めた頃と今とで大きく変わりました。

活動初期は、インターネットで「面白い本 おすすめ」と検索したり、タイトルや表紙のデザインを見て「ビビッときた」という直感を重視して選んでいました。

現在は、仕事としての読書は依頼を受けることが多いのですが、自分で選ぶ時は、これまでの読書経験で自分の好みを把握

しつつ、特に新刊を意識して選んでいます。書店で良い場所に置かれている新刊は、すぐに次の新しい本に場所を譲ってしまいます。だからこそ、多くの人の目に触れる期間が短い新刊を積極的に紹介したいと考えています。

Q どの書店に行くか、どのように決めていきますか？

A 普段は、品揃えが豊富な近所の大型書店に行くことが多いです。ただ、仕事で地方などに行った際は、その土地ならではの書店を積極的にチェックするようにしています。

Q 僕は音楽活動をしていて、将来仕事にしたいと考えています。でも、好きなことを仕事にした時、それを好きでいらなくなるのではないかと不安があります。けんごさんは、そうした葛藤とどうやって折り合いをつけていきますか？

A とてもよく分かります。苦しい部分は正直あります。仕事になると、自分が好きな本だけを読んでいられるわけではありませぬから。でも、そんな僕を支えている核となるモチベーションが二つあります。

まず、「読むのが好き」という根源的な気持ちです。何よ

りも、僕自身が小説を読むこと自体を心から楽しんでいるという事です。次に「自分の言葉を届けたい」という気持ちです。自分の紹介をきっかけに、誰かが本を手にとってくれることが、何よりの喜びであり、やりがいです。この二つのモチベーションが軸にあるから、苦しいことがあっても乗り越えられます。もし僕が全く好きではないものを紹介していたら、どれだけ稼げたとしても、この活動は続けられなかったでしょう。結局、好きだからこそ、苦しいことも乗り越えられるんだと思います。

Q 以前は会社員をしながら活動されていたそうですが、専業になったことの良い点はありますか？

A 専業と副業というように、他の軸を持つことには、それぞれメリットがあると思います。専業のメリットは、活動に多くの時間を投資できることです。使える時間が増えれば、それだけ作品のクオリティを上げることが集中できます。一方で、他の軸を持つメリットは「心の安心感」に繋がります。実は僕も、今でも会社員時代に身につけた映像制作の仕事を続けています。割合で言えば小説紹介が八で映像制作が二くらいですが、

もう一つの軸があることで精神的に安定します。今の時代、一つのことに絞って頑張るのも素敵ですが、将来の選択肢を複数持つておくのも一つの生き方だと思います。

Q 活動を続ける中で、仕事に對する気持ちの変化はありましたか？

A 最も大きく変わったのは責任感が芽生えたことです。この活動を通じて、作家さんや編集者さんといった出版業界の方々と交流する機会が増えました。そこで業界の厳しい現状、例えば「斜陽産業」と呼ばれてしまふことがある、という現実を知ることがなりました。だからこそ、「僕の活動が、素晴らしい小説を一人でも多くの人に届ける一助になれるかもしれない」という強い思いが生まれました。この責任感が、今の僕を突き動かす大きな力になっています。

Q 電子書籍は読みますか？僕は、電子書籍は横書きだったりして少し読みにくいと感ずることがあります。けんごさんはどう思っていますか？

A 僕は紙の本だけでなく、電子書籍や「耳で聴く本」であるオーディオブックも積極的に活用しています。例えば、満員電

車の中ではスマホで手軽に読める電子書籍を、家事をしながらオーディオブックを聴く、といった具合です。こうやって様々なメディアを使い分けるのは、あらゆる時間を読書に費やしたいからです。ただ、色々なツールを使っていますが、「紙の本が一番好きで、一番大切にしたい」という気持ちは変わりません。その理由は、紙の本が作品の世界観を最も感じられるからです。作家さんは、改行の仕方やページをめくるタイミングまで計算して文章を書いていることがあります。そういった細やかな「こだわり」は、紙の本でしか味わうことができません。また、データは便利ですが、いつか消えてしまうかもしれない儚さがあります。一方で、物体として存在する紙の本は、大切にすれば長く受け継がれていく。それは、人間が「物体として存在するモノ」をより大切にしている性質を持っているからかもしれません。

Q けんごさん自身を大人にしてくれた、大きな影響を受けた本はありますか？

A 三浦しをんさんの『風が強く吹いている』です。この本に出会ったのは大学三年生の時です。当時、僕は大学野球部に所属していたのですが、モチベー

ションが大きく下がってしまふ、「もう辞めてしまおうか」と本気で考える、その一歩手前まで気持ちが追い詰められていました。そんな時にこの小説を読んで、「結果が出なくても、最後まで一生懸命頑張ろう」と強く思わされたんです。あの時、この本のおかげで野球を最後まで続けられたからこそ、今の活動がある。そう確信しています。僕の人生を変えてくれた、本当に大切な一冊です。

Q 僕は部活動で司会をすることが多いのですが、言葉選びで迷うことがあります。けんごさんが情報を発信する上で、大切にしていることは何ですか？

A 伝わりやすさを最重要視しています。小説を全く読んだことがない人にも伝わるように話すことを常に意識しています。専門用語を避け、言葉を一つひとつ噛み砕いて話す。相手がそのテーマに全く興味がなかったとしても、スッと心に入っていくような言葉を選ぶことが、伝える上で最も大切なことだと考えています。

Q 最後に、高生へのメッセージをお願いします！

A 僕は高校時代、野球に全てを捧げた三年間でした。もちろん、「もっと読書をしておけばよかった」という後悔もありますが、同時に「もっと遊んでおけばよかった」という後悔もあります。皆さんには、たくさんの選択肢があります。勉強も、部活も、そして遊びも。色々な選択肢を存分に使って、高校生活を楽しんでほしいと思います。

『参加生徒の感想』
緊張して何を話したか覚えていないくらいだったが、けんごさんは非常に落ち着いていらしたのが印象的であった。けんごさんの話し方からは、経験に基づいた強い芯を感じた。

仕事や出版業界の話から、言葉選びのことまで、貴重なお話を聞けてとてもよかった。話し方が非常に上手で、自分もけんごさんのように話せるようになりたいと思った。

本の選び方を知ることができたのが良かった。自分は今まで図書館の本を借りることが多かったが、書店での本の探し方のコツを知ることができたので、実践していきたい。また、電子書籍についての意見も参考になった。
(担当 二年 若林 小熊 栗原)

プロフィール



けんご@小説紹介
1998年生まれ、福岡県出身。大学進学を機に横浜へ上京し、現在は東京在住。

SNSで小説の紹介動画を投稿する動画クリエイター。短尺での確に小説の魅力伝える動画が話題を呼び、幅広い年齢層から絶大な支持を集めている。紹介後に重版がかかる書籍も多数。SNSの総フォロワー数は110万人以上。著書に『けんごの小説紹介 読書の沼に引きずり込む88冊』など。

けんごさんおすすめの一冊

『風が強く吹いている』
三浦しをん著 (新潮文庫)



『スマホ時代の読書』

校長 佐鳥 秋彦



読書をしていますか？

本は嫌いじゃないけど、勉強に部活、ついスマホも見てしまつて…という声が聞こえてきそうです。実際、今年一〇月に行われた調査では、小学校高学年から高校生までの半数以上が「一日の読書時間はゼロ」と答えたそうです。でも、だからと言って「もっと読め」と叱るつもりはありません。むしろ、生活の中心にスマホがある現代で、読書が昔と同じ役割を果たすほうが不自然なのかもしれません。

という基準だけでは価値を測れなくなっています。歴史の細かな数字は検索すれば済み、外国語もアプリが即座に訳してくれる時代です。

では、読書の価値は薄れてしまったのでしょうか。私は、そうは思いません。読書の本当の魅力は、ただ知識を得ることではないからです。読書とは、先人たちが生きてきた知的な世界に触れ、その空気を吸い込むような体験です。本を通して、誰かの思考の深さに憧れたり、表現の美しさに心を揺さぶられたりする。スマホがいくら便利でも、こうした心の震えまでは代わり起こしてくれません。

授業や部活動で皆さんの時間が限られていることはよく分かります。まとまった読書時間を確保するのは難しいでしょう。それでも、わずかな隙間の時間でも本に触れてみてほしいのです。一冊の本との出会いが、自分の考え方や世界の見方を、そつと変えてくれることがあります。スマホが与えてくれる素早い答えとは違う、じっくり心に残る何かを、本は静かに差し出してくれれます。忙しさの合間にほんの少しだけページを開いてみませんか。そこには、今の自分に必要な一言が待っているかもしれません。

校内ビブリオバトル

七月十一日に図書室で校内ビブリオバトルが開催された。出場者はそれぞれお気に入りの本を持ち寄ってその本の魅力をリスナーたちに五分間で伝える。リスナーたちはすべての出場者の発表が終わると「自分が一番読みたくなった本」に投票をする。最終的にもつとも多くのリスナーの支持を集めた本が「チャンプ本」となる。これがビブリオバトルだ。

今回チャンプ本に選ばれたのは二年若林颯人さんが紹介してくれた小説『四畳半神話大系』だ。若林さんは発表の中でその小説の内容はほとんど明かさなかつたものの、まるで落語家のように落ち着きとユーモアを含んだ語り口によって登場人物の魅力を流暢に語り、リスナーの関心を引いた。おめでとう。この作品は地上波でアニメが放送されていたことがあるらしく、若林さんがこの小説に出会うきっかけもアニメだったという。気になる人は小説もアニメも要チェックだ。ほかにも夏にぴったりの短編ミステリホラー

小説『家守』、とある企業の創業者がモデルになった歴史小説『海賊と呼ばれた男』、シンガポール二百年の歴史を記した新書『物語シンガポールの歴史』など、幅広いジャンルの本が発表された。どの発表者からもその本に対する愛情が伝わってきた。また、リスナーの活発な質疑応答とリアクションによってビブリオバトルは大変有意義であつたかい場になった。

高生の本と言えば英単語帳や古文単語帳、文法書、一問一答などで、それらで勉強したことをテストで発揮し、点数を競い高め合う高生の姿勢はさすがと言ったところだろう。しかし、たまには受験に使わない本を読んで得た感動を語り合うのも素敵だ。次回も多くの参加を待っている。(担当 二年 片貝)



岩波ジュニア新書 出張読書会

十二月十二日に、岩波ジュニア新書編集部山下さんをお迎えして出張読書会を開催しました。『フレージャー！就活高校生』中島隆著（岩波ジュニア新書）をテキストにして、八名の生徒が意見交換を行いました。今回のテキストは、高生とかけ離れているのでは？と思うようなタイトルでしたが、自分たちの将来や現代の社会課題などを考えるきっかけになるテキストでした。

読書は、個人でするものというイメージがありますが、読書会という形で読み合うことで、得るものが大きかったと思います。今後は校内でも読書会をやってみたいと考えています。



高崎高校読書感想文コンクール令和七年度 群青大賞 最優秀賞(二位)
第七回青少年読書感想文全国コンクール群馬県内審査 自由読書の部最優秀賞

忘れていく中で輝くもの

(アルジャーノンに花束を)

二年 鈴木 雄弘

人に優しく。誰もが小さい頃に一度は言われた言葉だと思ふ。人に親切にされると嬉しい。しかし、私達は多忙な人生や人との関わりの中でこの言葉を忘れ、振り向く余裕がなくなってしまう。この本は私に、そんな人の根本にある温かい心を思い出させてくれた。

物語のチャーリーは知的障害を持つ幼子のような青年で、職場や家族の中でも孤独だった。周囲の人々の嘲笑を受容と信じて生きている姿はあまりにも残酷だった。最初は私も「知能」という隔たりは手術で消え、チャーリーは幸せになれるだろうと思っていた。しかし孤独は深まっていく。天才となったゆえに過去のいじめや家族との確執を理解してしまい、職場の同僚達は彼の高い知能を恐れ遠ざけ、父には息子と気付いてもらえない。私は打ちひしがれた。対等な関係を欲するチャーリーは報われないのだろうか。

それでも物語は、チャーリーに一筋の光を照らしていた。

チャーリーはかけがえない経験を集め、見える世界を豊かにしていった。背負っていた母の呪縛を解いたこと、研究を発表したこと、人を愛すのを知ったこと……。無垢だが自分でも知らない奥に暗さを抱えた過去のチャーリーとは違う。例え記憶が思い出せなくとも、間違いなく心に刻まれていく。だからこそ知能が失われゆく中で彼が記した「この世界にあることも知らなかったたくさんのことを、ほんのちよつとの間でも覚えることができるよかった」という言葉が重く響く。彼の知った世界が崩れることはとても悲しく苦しかったが、それでも彼の人生は決して空っぽなものではなかったと心から思う。

士、ドナー、ギンピイ、ノーマに支えられたのと同じように、幼かった私も、祖父との触れ合いを通じて少しずつ学んできた。かるたをしながら文字を覚え、図書館で物語を読み聞かせてもらって本が好きになった。スーパーに連れて行ってもらい、数多くのお菓子の中から欲しい物を選ぶことで買物物を覚えた。車が大好きだった頃には、散歩道の幹線道路で祖父と車種を言い合いながら会話をした。そんなとき、祖父の笑顔は優しく、頼もしかった。そうした日々が今の自分を形作っている。人は決して一人では成長できない。さまざまな経験の積み重ねや、祖父をはじめ家族の愛情に守られてきたからこそ私は今の自分になれたのだ。

「どーかついでがあつたらうらにわのアルジャーノンのおはかに花束をそなえてやってください。」最も印象的だった場面だ。チャーリーと同手術を受け、やがて知能を失い死を迎えた実験の白ネズミであるアルジャーノンの死をチャーリーが悼む言葉で、この物語は締め括られていく。知識を失い、焦りと苦悩に襲われながらも、アルジャーノンの墓に花を供えるようお願いすることだけは忘れなかつたチャーリーの姿に心を打たれた。そんな彼に、私は祖父を重ねた。祖父は長年家族の支えであったが、最近では体調を崩し、歩くこともささめ難しくなり、やがて孫である私や妹が何歳なのかも分からなくなった。私と最後に会った日や話題を思い出せなくなったとき、胸の奥に大きな穴が開いた気がした。それでも、祖父はただ衰えていくばかりではなかつた。入院を決めた在宅最後の日、ほとんど言葉が出なかつた祖父が、不意に母やその姉妹ですら知らない言葉を口にした。それは祖父と祖母が初めて出会う愛を深めた職場の名だつた。時間感覚を忘れ、次に何を忘れるか分からない祖父の記憶に、確かに「愛の始まりの場所」があつたことを知り、私は衝撃と泣きそうなるほど深い感動を覚えた。人は体も記憶も衰えるけれど、固く残るのは「愛」なのだと思感じた。思えば、幼い頃から祖父を含めた家族が私にたくさんのことを教えてくれたのも、見返りのない、深い愛があつたからだ。私はその愛に守られて生きてきた。

私達は普段、学力や成績、仕事の能力などで人を評価しがちだ。私自身、テストの点数や結果ばかりに目を向けてしまうことがある。しかし祖父の姿やチャーリーの物語を通じて、知識や能力は人の価値の一部に過ぎないと気付いた。本当に大切なのは、相手を尊重し、思いやる心。それは記憶や知識を失っても、最後までその人の中で輝き続ける。

人を信じる強さと優しさ。それこそが、チャーリーの本質で彼が最後まで残した宝物だと思う。祖父が示した言葉と同じように。私達は老いと共に記憶を失っていくかもしれない。その恐怖の中でお、チャーリーがアルジャーノンへ宛てたように、誰かの心に届く優しさを残せる自分でありたいと心に誓う。

この物語を読んでから、きつと私の心の中にはずっとチャーリーがいる。チャーリーが教えてくれた、アルジャーノンを思う気持ち、人を思う優しい心。それがどうか、自分の心の中に、これからも灯り続けますように。

(担当 二年 市村)

第七回青少年読書感想文

全国コンクール群馬県内審査

●佳作 「剃刀」を読んで

一年 小黒 伶太

●佳作 信じた球を

一年 宮 拓海

ビブリオバトル 群馬県大会

十一月八日、県立図書館にて行われた全国高等学校ビブリオバトル群馬県大会に参加しました。昨年は、部活の関係で辞退した県大会でしたが、本年はしかと参加し、楽しんでできました。

私が紹介した本は『四畳半神話大系』（森見登美彦著／角川文庫）です。この本は昨年の校内大会でも紹介しましたが、やはり、ビブリオバトルという人に本の魅力を伝える場においては、自分が最も好きな本でやるべきだろう、という思いから選びました。内容は、大学三回生の春までの二年間何一つ有意義なことはしていない、と断言できてしまう残念な主人公の「あの選択をすれば良かった。」という「もしも」の世界が描かれた四篇の話です。

この大会は県内二十校の代表者による予選を勝ち残った四名で決勝戦を行うという形式でした。私は残念ながら予選敗退となりましたが、知らない本について様々な人がその魅力を熱く語りあう時間は非常に良いもの

でした。語り方も、語るポイントも、人によってさまざままで、それらを聞く時間はとても充実したものとなりました。非常に興味深く、貴重な経験でした。

大会に参加するにあたって、図書委員会の皆さんには校内大会の運営などの協力をしていただきました。一部の方には県大会に向けての練習にも付き合っていたいただきました。皆さんのおかげでこのような素晴らしい大会に参加することができました。ありがとうございます。

今後もこのビブリオバトルという「アツイ」イベントが校内でも続いていき、多くの人が発表を通して様々な本や人、異なる考え方と出会い、考えを深めて世界を広げる素晴らしい経験をしていくことを願います。

(担当 二年 若林)



高崎地区 図書委員研修会

図書委員研修会は、高崎の高校の図書委員が集まって交流する行事だ。開催高校がいろいろな企画を用意してくれる。今年の開催校は高崎女子高校。高崎高校に届いた案内状はフレンドリーになっていた。

— お品書き —

- アミューズ アイスブレイク
- スープ 自己紹介
- メイン 本紹介
- アントレ 豆本づくり……

どうぞ心ゆくまでお楽しみくださいませ。

こんなふうに企画が書いてあったと思う。さすが高女、粋だ。高女生はたくさん企画を用意してくれていたが、本紹介について触れておこう。テーマは「夏におすすめた本」（と言っても夏に関係ない本を持ってく

る人もいた）。ホラー系や青春系が多かった。参加者は皆話るのが上手いと言った印象だった。しかし、それ以上に紹介する姿勢がイキイキしているのいい雰囲気だったと思う。私が個人的に気になった本は『蜘蛛の糸の秘密』（大崎茂房著）、『52ヘルツのクジラたち』（町田そのこ著）。ちなみに私がおすすめしたのは『野火』（大岡昇平著)。ちょうど終戦八十年だったので選んだ。他にも高崎市内の高校生の推薦本をまとめたブックリストも高崎高校の図書館にあるので、興味があればチェックしてほしい。

図書委員の研修会だからといって、図書委員としての意見交換をしたかといえはそうではなかった。「本好きが集まった」という感じだ。それはそれでかなり楽しいから、全く構わないのだが、高校生の読書量が少ないという図書委員として残念な現状があるのだから、そういった課題に対する取り組みなんかを少し話し合えたら、一層良かったのかもしれない。

もう一点。アイスブレイクはグループで一つの論理クイズを解いた。論理クイズは問題文の

状況を把握し、最終的に何を求めるかを整理しながら解かなければならない。数学的な思考力を必要とする半面、知識を必要としないから、高校生のアイスブレイクとしてはふさわしいと思った。高崎高校もいざれ開催校になるだろうから、こういう点は参考にするべきだろう。

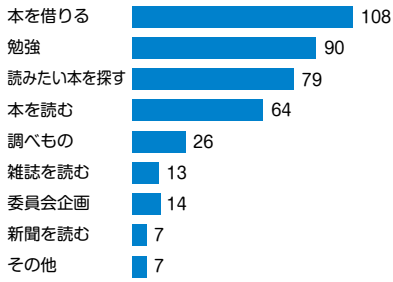
(担当 二年 片貝)

期間限定高神

二〇二六年の年明けに、毎年恒例になっている期間限定高神社を設置しました。図書委員が作成したおみくじと絵馬を用意して、新年の運試しと願い事を書けるように準備しました。ブラックボードは美術部員さんが今年の干支の午を描いてくれました。



図書館を利用する目的



読書アンケート結果より

全校生徒を対象に行った図書館アンケートでは図書館利用率が52%でした。利用目的は「本の貸出」や「勉強」が多く、他にもイベントなど様々な目的で利用されています。一方、1か月の読書量が0冊の人は56%で、これは全国平均(55.7%)とほぼ同じ水準です。現状の課題は、不読率が高いことや、便利な蔵書検索の認知度が低いことです。また自由記述では「学習環境の充実」や「ラノベ・参考書等の入荷」を望む多くの声を頂きました。これらを参考に選書や広報を工夫し、使いやすい図書館を目指します。ご協力ありがとうございます。(担当 一年 川上)

図書館でボードゲ!

十二月十五日から十九日の一週間にわたり、「図書館でボードゲ!」というテーマで、様々なボードゲームの展示と試技が行われた。ここ数年、学校図書館や自治体の公共図書館で、ボードゲームを所蔵し、貸し出しや希望者を募ってのプレイイベントが行われることが見かけられるようになったことからこの企画が持ち上がった。

なぜ図書館でボードゲームを、と思われる向きもあろうが、図書館法第一章第二条には、「この法律において『図書館』とは、図書、記録その他必要な資料を収集し、整理し、保存して、一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資することを目的とする施設」とある。ボードゲームという「資料」を収集・整理・保存し、「レクリエーション」を提供するという役割を担う施設として図書館は位置付けられている。

図書館でボードゲームを扱う利点としては、まず、それが文化財としてアーカイブ化される

べき資料であるということが挙げられる。また、図書館に来たことのない人を呼び込み、書籍(ラノベ、ファンタジー、SF、美術など)とのかかわりを紹介できる材料として有用であることが挙げられるだろう。

今回の高崎高校図書館企画「図書館でボードゲ!」では、重量級(コマ数が多く、プレイに長時間かかる)のボードゲームから、短時間でプレイできるカードゲームまで、様々な種類を展示した。ゲームのテーマは知的好奇心を刺激するため、人類進化を扱ったゲーム、歴史上の人物をカード化したゲーム、薬剤耐性菌と戦うゲーム(現役の医師がデザインしている)など、バラエティに富んだものにしてみた。

また、ゲームのテーマに関わる書籍をゲームの傍らに展示し、本への関心を高める試みも行った。例えば、人類の進化をテーマとした重量級ゲーム「バリオス・オリジンズ」の隣には、人類の進化とあるべき未来の姿を描いて話題になったユヴァル・ノア・ハラリ著『ホモ・デウス』を置いてみた。

試技に関しては、昼休みでも

プレイできるようにと、ルール解説も含めて短時間でできるカードゲームを中心に、歴史カードゲーム「History(ハイストーリー)」や、相手の手札の数值を推理する「Trinity(トリニティー)」などを用意した。静粛が求められる図書館でボードゲームを行えば、騒音が出て困るのではないかと指摘もあるが、この企画を実施する期間においては多少の騒音が出ることを事前に告知していることで、特に問題はなかった(はずである)。

今回は実験的な企画であったが、期日やプレイするゲームを決めて、プレイヤーを募って、定期的に図書館でボードゲームを行う企画を今後進めていきたい。



ブックマンズアカデミー高崎店でのPOP展示



十月二日、図書委員代表四名がブックマンズアカデミー高崎店において、選書ツアーおよび本校図書委員作成のPOPを展示したコーナー設置を行いました。店長の沖田さんに教えていただきながら、自分たちが紹介したい本を手にとり取って並べました。図書館での展示とは違い、お客様目線で考えることの大切さを学びました。

この企画は、お客様に好評とのこと、通年展示のご提案をいただきました。今後の委員会活動にも活かせればと考えています。

レコード鑑賞会

今年度は七月十六日と十二月十七日の二回、高崎名物のDJ、AKIRAによるレコード鑑賞会が開催されました！

アナログならではの「手間」と「体験」、ジャケットなど大きな魅力を見せてくださり、レコード音源による温かみ、柔らかさ、奥行き、豊かな空気感が、DJの愛ある解説とともに多くの生徒と先生の心に響きました。

DJの再びの来校を多くの生徒が楽しみにしています。
(担当 一年 荒木)



読書のすすめ・編集後記

本、読んでますか？

ちなみに私はあまり読んでいません。ネット小説をダラダラと読むのが趣味なだけで、きちんと「本」を読むのは月に一度あるかないか。その程度の読書量の人間が図書委員会に所属し、あろうことか委員長としてこの編集後記を書いています。極めつけには「読書のすすめ」だなんて書くというのです。全くおかしい話です。しかし、曲がりなりにも図書委員長ですので、仕事（命令）ですので、私が「読書のすすめ」を書かせていただきます。

「何のために本を読むのか」本を読まない人からすると、そもそも本を読む理由や意味そのものが分からないことがあるかもしれません。ですが、私が思うに本を多く読む人も特段深い意味は考えていません。小学校や中学校などで散々言われてきたような建設的で意義深いお考えを持って本を読む人は、そう多くいません。強いて言うならば、やはり「おもしろい」という気持ちこそが本を読む原動力です。おもしろいから、本を読むのです。そこに小難しい論理はありません。我々がスマートフォンでネットの海に漂う情報

を見て楽しむのと同様に、本を読む人もまた、装丁された紙の束に記された活字の中に、楽しみを見出しているのです。そしてその「楽しみ」は人によって違います。登場人物の性格か、話の展開の秀逸さか、主張の目新しさか、いずれにせよ、「おもしろいから」とか「興味があるから」とかそんなモンなので、「文章の読解力がつく」とか、「語彙が豊富になる」とかそんなことは偉ぶった事を語りながら子供に本を読ませたい大人が後付けした理由です。で、ありますから我々もつと気楽に本を読むべきです。義務感ではなく、ただ純粋な興味や好奇心で読んでこそ読書は楽しめる。また、そういった気持ちで読むからからこそ、読解力や語彙、感受性など様々な利点とされる能力が身につくのです。無論、勉強のためといった理由でも良いのです。むしろその気持ちならば能力という点ではより早く身につくかもしれません。

とにかく自発的に読むこと。それが重要です。逆に、無理に本を読んでしまうと却って読書への苦手意識が強まってしまいます。今は興味がなくとも、この先いつか、読書に興味を湧いたならばその気持ちを忘れる前に本を読んで下さい。

若い今しかできない読書経験というのがあるのも事実です。しかし、気持ち良く本と付き合っていくことも大事ですから、読書のことなどは頭の片隅に置いておく程度で丁度良いと思います。

眼と脳みそが若いうちの方が読書をしやすいというのは私の親の談ですが、まあ老眼鏡と明るい部屋を用いれば読めないこともないそうです。読書について興味を湧いたら、その気持ちを忘れないうちに、体が衰えていく前に何かしら本を手にとってみて下さい。きっとおもしろいですよ。

(担当 二年 若林)



新しくできたソファコーナーが人気！